

Title	若年層における「問題敬語」の規範意識
Author(s)	尾崎, 喜光
Citation	阪大日本語研究. 1994, 6, p. 111-129
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5737
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

若年層における「問題敬語」の規範意識

On the Normative Senses in Youth on the Questionable
Honorific Forms and Usage in Japanese

尾崎喜光

OZAKI Yoshimitsu

キーワード：問題敬語，敬語の誤用，規範意識，敬語意識

1. はじめに

言語研究を日常の仕事としていない一般の人々が言語というものを特に意識する場合、どのようなことを気にするのであろうか。NHKの第3回言語環境調査の報告である石野・丸田・土屋（1989）によると、「最近のことばづかいについて感じること」の第1位は「おかしな話し方や変な流行語が多くなった」であり、以下「敬語の使い方が乱れてきた」「女性のことばが荒っぽくなった」「意味のわからない外来語や外国語が多くなった」と続き、これらが上位グループを形成している。これらはいずれも、新しい言語形式や言語行動が台頭してきてそれが「ことばの乱れ」と意識されるものである。一般の人々にとってはこの「ことばの乱れ」が、ことばについての最も気になる問題となっているようである。

小稿ではこの「ことばの乱れ」のうち第2位にランクされた「敬語の使い方の乱れ」すなわち「敬語の誤用」とされる現象（もう少し正確に言うと誤用か正用・慣用か意見が分れる現象）についてとりあげる。ただし、「敬語の誤用」と言っても、次章に詳しく述べるように、言語形式の運用

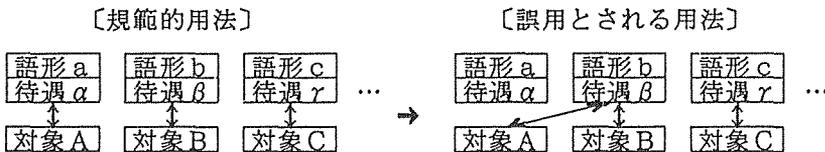
面における誤用と、言語形式そのものの誤用とがある。例えば、教師に対する「先生も行く？」は前者であるし（もし誤用とすれば）、広告でよく見かける「お求めやすくなりました」は後者である。小稿でとりあげるのは後者のタイプ、すなわち大石（1983；p. 327）が「問題敬語」と呼んでいる誤用である。筆者はこの「問題敬語」について、大学生がどういう規範意識を持っているかを見るためのささやかな調査を行なった。敬語は音韻や文法と異なり、言語形成期を過ぎて社会に出てからむしろ本格的に習得していくものであるので、年齢差から言語変化を導くにはかなりの慎重を要する。しかし今回の調査では、高度な敬語形式の自らの使用ではなく正誤についての判断を求めているので、この調査結果および他の若年層に対する先行調査研究によって、「問題敬語」が今後どう受け入れられて行くかその動向を予測することは、そう無理のあることではないと考える。

2. 誤用の類型

ひとくちに「誤用」といっても、次の2つのタイプが考えられる。

I. 語用論的誤用

語形とそれが表現する待遇の意味は従来のもままであるが、その運用の仕方・用法が従来 of 規範から外れることにより生じる誤用。下図を参照。



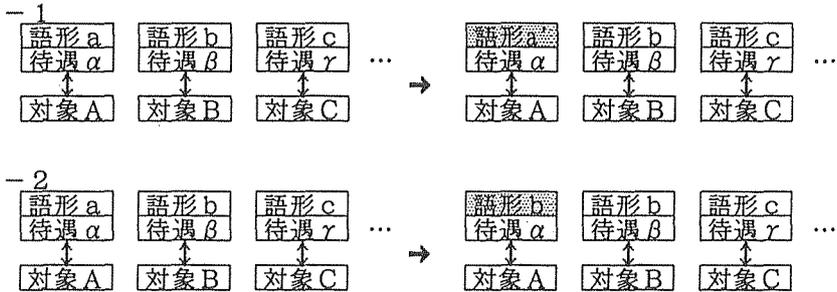
例 1) 先生も行く？ [尊敬語・丁寧語の不使用]

例 2) 私のお母さんも先生のお宅に行きます。 [謙讓語の不使用]

例 3) それでは発表させていただきます。 [謙讓語の過剰使用]

II. 記号論的誤用¹⁾

ある対象をどのレベルで待遇するかは従来のものであり、その待遇の意味を表現する際従来のもとは異なる語形を用いることにより生じる誤用。これはさらに次の2つのタイプに分けることができる。下図を参照。



Ⅱ-1のタイプは、待遇αを表現するのに、従来なかった新しい語形を採用するものである。

例4) お求めやすい値段になりました。[尊敬語の新語形]

従来なかった新しい語形といっても、全く新しい語形を用いることは少なく、従来の語形の一部を変える場合が多い。そのため、待遇αを表現しているということ自体についての誤解は少なく、ただ「変な言い方」であるという印象が持たれるものである。

それに対してⅡ-2のタイプは、新たに採用する語形が、別の待遇βを表現する語形として既に存在しているものである。

例5) (店員が客に) 少々お待ちしてください。[尊敬語←謙譲語]

この例の場合、尊敬語で表現するのが期待されることを、従来からある謙譲語で表現しているわけだから、しばしば「待遇の仕方・用法が誤っている」と批判されるものである。これは一見語用論的誤用のように見えるが、しかし状況や文脈から判断して相手をへり下らせているとは考えにくいので、やはりこれは記号論的誤用とすべきである。

小稿では、先にも述べたように、「誤用」とされる現象の中でも記号論

的誤用についてとりあげることにする²⁾。

3. 調査の概要

調査対象者は、文教大学文学部（埼玉県越谷市）の学生のうち、筆者が担当する「社会言語学」の講義を受講した学生である。1992・93年の4月のガイダンス時にアンケート用紙を配布し回答してもらった。回収数は77人であった（1992年度41人，1993年度36人）。今回の分析では、このうちの外国人6人と、人数が少なかった男子学生8人の回答を除外した（ただし男子学生の回答は参考資料とする）。これらを差し引いた女子学生63人（1992年度36人，1993年度27人）の回答を今回の分析の対象とする。表題で「若年層」としたのも、じつは首都圏の女子大学生という限定つきのものである。なおデータを見る際もう一つ留意すべき点は、この講義は日本語教員養成のための講義の一つであって受講者の多くは日本語教師を目指しており、従って日本語に対する規範意識の高い者がサンプルとして多く選ばれている可能性があるという点である。女子学生一般さらにはこの年齢層の女性一般の規範意識は、今回得られたデータよりも緩い可能性がある。逆に言えば、今回得られたデータはこの年齢層の規範意識の最高値に近いところを捉らえていると考えられる。

調査時の学年の分布は、2年生54人，3年生7人，4年生2人である。

5～15歳の最長居住県の分布は次のようであった。埼玉県を中心とする関東地方が多い。

北海道3，福島1，群馬2，茨城3，栃木5，埼玉16，東京8，
千葉7，神奈川4，山梨2，静岡4，富山2，愛知1，兵庫1，
広島1，香川1，福岡1，沖縄1

出身県もこれに近い分布であった。また両親の出身地についても、半数以上はやはり関東地方であったが、多少全国的な分散を示し、そのうち東北・北海道地方にやや片寄りが見られた（特に母親で）。従って回答者の地理的背景は、埼玉県を中心とする関東地方に東北・北海道地方の影響が

幾分加わったものが主体となっていると言える。

アンケートでは「問題敬語」を含む短文を示し、設問の前に次のような指示文を示した。なお「数字」とは設問番号のことであるが、小稿で付けた番号とは異なっている。

次の文の中で、まちがった言い方・不適切な言い方がもしあったら、数字に×をし、まちがいだと思う部分に中線を引き、正しい言い方・適切な言い方になおしてください。もし特にまちがいが無ければ、数字に○をしてください。

この指示文からもわかるように、この調査ではその言い方を自分でするかどうかという「使用意識」ではなく「規範意識」を尋ねている。

4. 結果と考察

4.1. 小鳥にエサをあげました。

下線をほどこした部分が設問のポイントである。(アンケートには下線をほどこしていない) こうした用法は、謙譲語を使わなくていい相手に対して謙譲語を使っているとしてよく話題にされる「問題敬語」である。結果は次のとおりであった。(全角の数値は人数。括弧内は百分率。×のあとの→は訂正。以下も同様。)

○…… 35 (55.6%)

△…… 1 (1.6%) ←「やりましたも使う」とのコメントあり。

×…… 27 (42.9%)

→ ①あげた1 (1.6%), ②やりました19 (30.2%), ③やった2 (3.2%), ④やる2 (3.2%), ⑤与えた1 (1.6%), ⑥やりました／与えました1 (1.6%), ⑦くれました1 (1.6%)

訂正したもののうち①は主動詞が「あげる」であるので、許容派はさらに増え57.1%となる。半数以上がこの表現に問題なしとしている訳で、規範意識が高いと予想されるグループの間でもかなり容認されてきているようである。調査時期や調査対象が異なり多少比較しにくいだが、先行研究を

いくつか見てみると、稲垣・竹田・石野（1976）では女子大学生での支持率（積極的＋消極的）が68％、石野・稲垣（1987）では東京の16～29歳の女性での支持率（積極的＋消極的）が、あげる対象が自分の子供の場合は65％で植木の場合は63％、石野・丸田・土屋（1989）では東京100キロ圏の16歳以上の男女での支持率が、あげる対象が植木の場合70％、西山（1989）では神戸市の大学生男女での支持率（植木）が70％、という結果を得ている。いずれも支持率は半数を上まわっている。まだ圧倒的な支持を得ているという訳ではないが、かなり慣用化しているようである。

この「あげる」の用法は一見語用論的誤用のようであるが、しかし「小鳥にエサをあげたら元気に食べていらっしやったよ／召し上がっていたよ。」や「あげたエサがおいしいかどうか伺ってごらん。」のような他の尊敬語や謙譲語を使った表現が不適格になることからすると、「あげる」は謙譲語として用いられている訳ではなく、これもしばしば指摘されているように、美化語ないしは上品語として用いられているものである。記号論的誤用（Ⅱ-2のタイプ）の一つとすべきものである。

「あげる」の用法がこのように変化してきた理由は、一つには、しばしば指摘されるように、本来使用されるべき「やる」が、ちょうど「めし」「食う」がそうであるように、特に女性が使うことばとしてはぞんざいな言い方であると意識され使いにくくなったことが考えられる。そしてもう一つには、謙譲語には「さしあげる」という表現がまだ残されているため「あげる」の用法が変化する余地があったということが考えられる。

なお「くれました」への訂正は、標準語では文法的に誤りとされるものであるが、東日本では広く用いられている用法である。

男子学生については、8人のうち7人が○を付けていた。

4.2. いま社長が申されたように…。

この用法は、尊敬語を使うべきところに謙譲語を使っているとして、また謙譲語に尊敬の助動詞を付けているとして問題にされるものである。結果は次のとおりであった。

○…… 5 (7.9%)

×…… 58 (92.1%)

→ ①申されました 2 (3.2%), ②申しました 1 (1.6%), ③おっしゃった 35 (55.6%) [1人は「状況によっては。'], ④おっしゃる 1 (1.6%), ⑤おっしゃられた 15 (23.8%), ⑥おっしゃられました 1 (1.6%), ⑦言われた 1 (1.6%), ⑧おっしゃった／言われた 1 (1.6%), ⑨ただいま 1 (1.6%)

この例文は実はあまりよくなかった。と言うのは、この発話は社外の人に対する発話とも受け取られ、その場合には「申す」はむしろ適切となるからである（ただし尊敬の助動詞の部分は不適切）。○をした者の中にはそう解釈して○をした者もいたかもしれない。特に②への訂正はその可能性が高い。しかし○の人数は少なく、②も1人なので影響は小さい。

主動詞に訂正のない①②⑨を○に加えても許容派は14.3%であり、かなりの者が抵抗を感じているようである。先行研究をいくつか見てみると、石野・稲垣（1987）では現代劇での「申される」を不自然とする者は東京で64.1%、石野・丸田・土屋（1989）では「社長が申されるとおりです」をおかしいとする者は43%、安平（1993）では「部長が、ただ今申されたことに、私は全面的に賛成です」を誤りとする人は60%（特に女性では7割）、広島市の短大生を調査した内山（1991）では「大臣が申されました」を誤りとする比率は41.9%である。本調査ほどではないが、半数程度は問題ありとしている。よく使われる表現ではあるが規範意識としてはまだ十分支持を得ていないようである。「申される」を許容する場合は、大石（1983；p. 320）も指摘するように、尊敬語というよりも場面の改まりによる丁寧語として用いているものと見ることができそうである。「申された」をそのままにして「いま」を「ただいま」という改まった固い表現に訂正した⑨は、そのへんの意識を反映しているものと考えられそうである。

なお主たる訂正は、主動詞を敬語動詞「おっしゃる」に訂正するものであるが、「おっしゃられる」という後出の二重敬語にする者も少なくない。

4.3. ご用の方は係員に申してください。

これも、先程の「申された」と同様、尊敬語を使うべきところに謙譲語を使っているとして問題にされるものである。結果は次のとおりであった。

○…… 3 (4.8%)

×…… 60 (95.2%)

→ ①おっしゃってください 21 (33.3%), ②お申しつけください 22 (34.9%), ③申しつけください 1 (1.6%), ④申しつけてください 1 (1.6%), ⑤お申し出ください 9 (14.3%), ⑥までお申し出ください 1 (1.6%), ⑦申し出てください 3 (4.8%)
⑧お申し出ください／おっしゃってください 1 (1.6%), ⑨中線および具体的な訂正無し 1 (1.6%)

これについてもかなりの者が抵抗を感じているようである。しかし、訂正した場合、前部要素にやはり「申す」を持つ「(お)申しつけ」「(お)申し出(て)」に訂正するケース(②～③)が60.3%とかなり多い。内山(1991)によると、「心当たりの方は申し出て下さい」を不可とする者は5.1%とやはり非常に少ない。複合語内の「申す」はもはや謙譲語の意味を持っていないようである。ただし単純語として出た時にはまだかなり抵抗感がある。使う場合は丁重語としての意識が強いものと考えられる。

4.4. (放送で)練馬からおこしの山田様。おりましたら事務室までおい てください。

これも尊敬語を使うべきところに謙譲語を使っているとして問題にされるものである。結果は次のとおりであった。

○…… 3 (4.8%)

×…… 60 (95.2%)

→ ①いらっしゃいましたら 46 (73.0%), ②いらしたら 1 (1.6%)
③おられましたら 6 (9.5%), ④いらっしゃいましたら
／おられましたら 1 (1.6%), ⑤おられましたら／おいででしたら 1 (1.6%), ⑥ございましたら 1 (1.6%), ⑦「おりましたら

たら」に単に中線 1 (1.6%), ⑧おこしく下さい 3 (4.8%),
 ⑨おりられましたら 1 (1.6%) [勘違い?], ⑩中線および具
 体的な訂正無し 1 (1.6%)

2箇所訂正した者が2人いたため、×の内訳の合計は62になる。

これも支持率はかなり低い。⑧を○に加えても9.5%である。主たる訂正は「いらっしゃいましたら」への訂正だが、「おられましたら」への訂正も12.7%ある。尊敬の助動詞を付加すれば「おる」も多少許容される。

石野・稲垣(1987)によると、「横浜の田中さん、おりましたら駅長室までおいでください」をおかしい・誤りとする者は、東京での場合43.7%であった。まだ十分に受け入れられていない用法のようである。

こうした「おる」の用法について、坂本(1984)は、聞き手というよりも「場」に対する配慮であるとし、これを丁重語としているが、そうした意識が働いているものと考えられそうである。

以上の3項目を通して眺めると、従来の謙讓語を丁重語として用いる用法は、規範意識が高いと予想されるグループの間ではまだほとんど許容されていないようである。

なお男子学生の回答は、「申された」は○が3で×が5、「申して」は○が1で×が7、「おりましたら」は○が2で×が6であり、支持率はやはり低い。

4.5. (店員が客に) 少々お待ちしてください。

これも尊敬語を使うべきところに謙讓語を使っているとして問題にされるものである。結果は次のとおりであった。

○…… 2 (3.2%)

×…… 61 (96.8%)

→ ①お待ちになってください 5 (7.9%), ②お待ちください 49 (77.8%), ③お待ちください(ませ) 2 (3.2%), ④お待ちくださいませ 1 (1.6%), ⑤お待ちになってください/お待ちください 1 (1.6%), ⑥お待ちいただけますか 1 (1.6%), ⑦中線

および具体的な訂正無し 2 (3.2%)

まだほとんどこの表現は受け入れられていないようである。かなり前の調査になるが、東京・大田原・奈良・高松で調査した田中(1969)によっても、「お聞きしてください」の支持率は5.9%、「うかがってください」の支持率は3.3%と少ない。一方最近の調査の石野・稲垣(1987)によると、「受付でお聞きしてください」の東京での不支持率は全体でわずか30%にまで落ちてきている。また石野・丸田・土屋(1989)によると、「ここでお待ちしてください」の不支持率は59%である。さらに西山(1989)によると、「ご乗車しませんか」の不支持率は67%である。対象や方法が異なるため安定した数値は得られていないが、しかし少なくともまだ十分な支持は得ていないようであり、特に本調査のような規範意識が高いと考えられるグループの間ではかなり抵抗感があるようである。

なお男子学生の回答は全員不支持であった。

4.6. あすは会社をお休みします。

「お～する」は、相手に関わる自分の行為等を表わす動詞を謙譲語にするパターンとして用いられているものであるが、相手に関わらない動詞に用いているとして問題にされるものである。結果は次のとおりであった。

○…… 13 (20.6%)

×…… 50 (79.4%)

- ①休みます 22 (34.9%), ②休みます【記入は「休みします」】 6 (9.5%), ③休みにします 1 (1.6%), ④休ませていただきます 17 (27.0%), ⑤お休みさせていただきます 1 (1.6%)
 ⑥休みます／休ませていただく 1 (1.6%), ⑦休みます／お休みさせていただきます 1 (1.6%), ⑧会社はお休みです 1 (1.6%) [勘違い?]

8割方はこの表現に抵抗を感じている。ただし、「休ませていただきます」への訂正が多いことからすると、例文に受惠表現が無いことが不可とされた原因の一つであったとも考えられるので、2割とされた許容派は実

はもう少し多くなる可能性がある。規範意識が高いと思われるグループとしてはある程度の支持を得ているとも言える。西山(1989)での支持率も42%と少なくない。こうした「お休みする」の用法は、大石(1983; p. 33 5-6)も指摘しているように、上品語として用いているものと考えられる。男子学生の回答は全員不支持であったが、この事実もこれが美化語として用いられていることを裏付けていると考えられる。

4.7. ご希望の方は履歴書をご持参ください。

尊敬語を使うべきところに謙譲語を使っているとして問題にされるものである。結果は次のとおりであった。

○…… 5 2 (82.5%)

×…… 1 1 (17.5%)

- ①持参ください 2 (3.2%), ②持参してください 3 (4.8%),
 ③ご持参のうえおこしくください 1 (1.6%), ④お持ちください
 3 (4.8%), ⑤持ってきてください 1 (1.6%), ⑥中線および
 具体的な訂正無し 1 (1.6%)

訂正したもののうち①②③は「持参」を使用しているので、「持参」の支持率はさらに増え9割を越える。もはや「持参」には謙譲の意味は含まれておらず、待遇的にはニュートラルな表現と見ることができる。

なお男子学生の回答も、○が5人、×が3人と、許容派が多かった。

4.8. 先生がさっきおっしゃられたように…。

二重敬語(二重尊敬)の問題である。結果は次のとおりであった。

○…… 4 0 (63.5%)

×…… 2 3 (36.5%)

- ①おっしゃられました 1 (1.6%), ②おっしゃった 1 4 (22.2%)
 ③おっしゃった／おっしゃいました 1 (1.6%), ④言わ
 れた 2 (3.2%), ⑤申された 1 (1.6%), ⑥さきほど 4 (6.3%)

4.9. (バスの運転手が客に) お乗りになられましたら順に中へお詰め
ください。

これも二重敬語の問題である。結果は次のとおりであった。

○…… 3 1 (49.2%)

×…… 3 2 (50.8%)

→ ①お乗りになられたら 1 (1.6%), ②ご乗車になられましたら
2 (3.2%), ③お乗りになりましたら 2 6 (41.3%), ④乗られ
ましたら 1 (1.6%), ⑤乗りられましたら 1 (1.6%), ⑥中へ
とお進みください 1 (1.6%)

昭和27年の国語審議会建議『これからの敬語』によると、「お～になる」を「お～になられる」とする必要はないとし二重敬語を不要としているが、4.8.では3人に2人が○、4.9.でも半数は○であり、現在でも少なからぬ支持を得ている。「おっしゃられた」を調査した西山(1989)でも支持率は46%と半数近い。また「お～になられる」について調査した石野・稲垣(1987)や安平(1993)によれば、不支持率はさらに低く10%台である。二重敬語がこのように比較的 support を得ている理由は、文法的には確かに問題があるものの、尊敬語として用いられているという点においては変わりがないためであろう。こうした二重敬語に対する support の高さは、4.2.の「いま社長が申されたように…。」で、「申された」を「おっしゃられ(まし)た」に訂正した者が16人(25.4%)いたことから伺われる。

なお男子学生の回答も、4.8.では○が6人、×が2人、4.9.でも○が5人、×が3人と、支持率はやはり高い。

4.10. お求めやすい値段になりました。

動詞「求める」の連用形に接尾辞「やすい」を付けて形容詞化した「求めやすい」を尊敬語にするには、まず動詞の部分を「お求めになる」と尊敬語にし、これに「やすい」を付けて「お求めになりやすい」とするのが従来の規範的な造語法であるが、大石(1983; p. 331)の指摘にもあるように、「お-美しい」「お-やさしい」などがある訳だから「お-求めやい

す」があってもいいという考え方から生まれた新しい造語法と考えられる。結果は次のとおりであった。

○…… 4 2 (66.7%)

×…… 2 1 (33.3%)

→ ①お求めになりやすい 4 (6.3%), ②お求めしやすい 2 (3.2%)

③お値段 1 2 (19.0%), ④価格 1 (1.6%), ⑤いたしました 1 (1.6%), ⑥中線および具体的な訂正無し 1 (1.6%)

訂正したもののうち③④⑤は別の箇所の訂正であるので、「お求めやすい」の支持率はさらに90%近くにまで上昇する。今や慣用として広く受け入れられている表現であるといえることができる。石野・稲垣(1987)でも、「輸入品がお求めやすくなりました」をおかしいとする者は、東京でわずか6%である。関連する項目として安平(1993)に、「整理不十分な話をごたごとと申し上げて、おわかりにくかったかと思えます」があるが、これを誤りとする比率も22%とやはり少ない。このように高い支持を得ている背景には、この表現が記号論的誤用の中でもⅡ-1のタイプであることが影響していると考えられる。

なお男子学生の回答でも、この部分での訂正は皆無であった。

4.11. わたくし、先日お手紙さしあげた山田と申します。

自分の出した手紙に対して尊敬語を使っているとして問題にされうるものである。結果は次のとおりであった。

○…… 5 4 (85.7%)

×…… 9 (14.3%)

→ ①手紙 1 (1.6%), ②手紙を 2 (3.2%), ③お手紙を 1 (1.6%)

④しました 1 (1.6%), ⑤さしあげました 1 (1.6%), ⑥をさしあげました 1 (1.6%), ⑦を出した 1 (1.6%), ⑧中線および具体的な訂正無し 1 (1.6%)

訂正したもののうち③~⑦は「お手紙」を使用しているので、支持率は9割を越える。安平(1993)の調査でもこれを誤りとする者は17%であっ

た。『これからの敬語』によると、自分の物事ではあるが相手に対する物事で慣用が固定している場合は接頭辞「お」「ご」を付けてもよいとされているが、こうした用法は現在でも広く受け入れられている。尊敬語というよりも謙讓語としての用法である。

なお男子学生も、「お手紙」の部分の訂正は皆無であった。

4.12. (駅員が客に) 埼京線でしたら、そこを通りまして一番端のホームです。

丁寧語「ます」を尊敬語の代りに用いているとして問題にされるものである。結果は次のとおりであった。

無印… 1 (1.6%)

○… 42 (66.7%)

×… 20 (31.7%)

→ ①通って6 (9.5%), ②通られて1 (1.6%), ③通られまして3 (4.8%), ④お通りになって2 (3.2%), ⑤お通りになりまして1 (1.6%), ⑥通っていただいて3 (4.8%), ⑦「通りまして」に「?」1 (1.6%), ⑧そちら2 (3.2%), ⑨ホームになります1 (1.6%)

×をしたものの中で尊敬語に訂正したものは②～⑤のわずか約10%である。尊敬語を用いない「通りまして」はかなり用いられている。ただしこれは、尊敬語を丁寧語で代用をしているというよりも、尊敬語を使うまでもなく丁寧語だけで十分であると考えて「通りまして」を訂正しなかった疑いも少なくないので(つまりこれはむしろ語用論的問題)、ここでは分析を控えることにする。

男子学生についても、尊敬語への訂正は皆無であった。

なお「通って」「通られて」「お通りになって」「通っていただいて」への訂正は、従属節での対者敬語を不要とするものであり、あわせて12人(19.0%)いる。国立国語研究所(1964; p.170)によると、「です・ます」体で終る会話文の従属節で、接続助詞「て」が後接する動詞には対者

敬語が非常に付きにくいという結果を得ている（5.9%；7/119）。本調査は使用実態ではなく規範意識を尋ねているため直接の比較はしにくいですが、「～まして」に抵抗を感じる者は2割程度と少数派であり、従属節での対者敬語はかなり受け入れられてきていることが伺える。

4.13. （学生が教授に）先生、お昼食べたらもう帰る？

最後のこの設問は「問題敬語」ではない。教授の行為「食べる」「帰る」を、本人を目の前にして尊敬語を使って表現するか否かという、語用論的観点からの規範意識を尋ねようとした設問である。

設問の番号に×をつけた者が62人、無印の者が1人と、ほぼ全員が何等かの訂正を行なっている。なお×を付けたが具体的な訂正は結局どこにもなかった者が1人いた。この設問を4つの要素に分けて集計した結果は次のとおりである。ここでの○の意味は、冒頭の設問番号では×をしてあるが問題の要素の部分では何も訂正が無かったという意味である。

◆「食べる」の素材敬語

無印… 1（1.6%） [設問番号が無印の者]

○… 21（33.3%） [この要素について訂正が無い者]

×… 41（65.1%）

- ①召しあがる21（33.3%）、②召しあがられる1（1.6%）、③お召しあがりになられる1（1.6%）、④食べられる8（12.7%）
 ⑤お食べになる3（4.8%）、⑥済ませる2（3.2%）、⑦お済みになる1（1.6%）、⑧お済みになられる1（1.6%）、⑨とられる1（1.6%）、⑩おとりになる1（1.6%）、⑪「お昼のあと」として該当部分なし1（1.6%）

尊敬語への訂正は3人に2人ほどである。次の主節ではほとんどの者が尊敬語に訂正しているのに対し、従属節での尊敬語への訂正は必ずしも義務的ではなく規範が多少緩くなっている。ただし構文的な事情の他に語彙的な事情も考えられる。すなわち「食べる」は「食う」に対してすでに上

品語であり、このため尊敬語に変える必要を感じなかったのかもしれない。
なお男子学生の回答は、無印が1人、○が5人、×が2人であった。

◆「帰る」の素材敬語

無印… 1 (1.6%) [設問番号が無印の者]

○… 3 (4.8%) [この要素について訂正が無い者]

×… 59 (93.7%)

→ ①帰られる24 (38.1%), ②お帰りになる26 (41.3%), ③
お帰りになられる1 (1.6%), ④帰りになる1 (1.6%), ⑤お
帰り6 (9.5%), ⑥お戻りになる1 (1.6%)

ほとんどの者が訂正している。訂正のない3人のうち、1人は設問番号に×をしたがどこにも訂正がない者、2人は対者敬語「ます」を付けている者であり、「帰る？」のままの者は実質的に皆無である。少なくとも対者敬語は用いている。先程の「通りまして」で見ようとした尊敬語の丁寧語での代用をここで見る事ができる訳であるが、非常に少ないと言える。

大石(1983; p.261-63)の大学生調査によると、当の先生に向かっての発話のうち、本調査と同じく「質問表現」の項目について女子学生の素材敬語の使用率を見てみると、「好きか」で約90%、「知っているか」では100%近くとなっている。また、大石の項目を関西の女子学生に対し調査した濱崎(1990)によると、素材敬語の使用率は、「知っているか」「好きか」ともに90%を越えている。素材敬語の使用率はかなり高いようである。

なお男子学生の回答は、無印が1人、○が2人、×が5人であった。

◆「食べる」の対者敬語

無印… 1 (1.6%) [設問番号が無印の者]

○… 51 (81.0%) [この要素について訂正が無い者]

×… 11 (17.5%)

→ ①ます10 (15.9%), ②「お昼のあと」として該当部分なし
1 (1.6%)

丁寧体文の複文の従属節内で対者敬語が使用されるか否かの問題である。

対者敬語「ます」の使用率は15.9%である。

35年ほど前の三尾（1958；p.249）の調査によると、「です体」で終る戯曲の文の従属節で、この設問と同じ接続助詞「たら」が続く用言で対者敬語が使われる比率はわずか6.0%である。また、国立国語研究所（1964；p.170）の調査によると、それと同じ条件の会話文では、対者敬語は全く使われない（0/21）。これが、最近の盧（1989）の調査によると、やはり同じ条件で、座談会資料では19.4%、大学生のアンケート調査では13.7%という結果を得ている。他の接続助詞と比べると対者敬語の使用率は依然として低くはあるものの、かつてに比べると増加してきているようである。本調査でも、積極的に対者敬語を付けた者は15.9%とまだ少数派ではあるが、徐々にこの表現が受け入れられてきていることが伺える。対者敬語に限定して言えば、全体的に物言いが丁寧になってきているようである。

なお男子学生の回答は、無印が1人、○が7人、×が0人であった。

◆「帰る」の対者敬語

無印… 1（1.6%）〔設問番号が無印の者〕

○… 1（1.6%）〔この要素について訂正が無い者〕

×… 61（96.8%）

→ ①ます48（76.2%）、②です13（20.6%）

○は、設問番号には×してあるが具体的な訂正はどこにも無い者。従って実質的に全員が対者敬語を使用すべしとしている。敬語の使用が最近減ってきているとよく言われるが、文末の対者敬語は今もほぼ義務的である。

なお男子学生の回答は、無印が1人、○が0人、×が7人であった。

5. ま と め

埼玉県を中心とする関東地方をおもな地理的背景とする女子大学生—特に規範意識が高いと考えられるグループ—に対して行なった「問題敬語」の規範意識についての調査を行なった結果、次のことがわかった。

- ①「あげる」の美化語・上品語としての用法は半数以上の支持を得ている。
- ②「申された」「申して」「おりましたら」の丁寧語としての用法、「お待ちして」の尊敬語としての用法にはかなりの人が抵抗を感じている。
- ③「お休みします」の上品語としての用法はある程度支持を得ている。
- ④「ご持参」は待遇的には今やニュートラルな表現となっている。
- ⑤「おっしゃられた」「お乗りになられましたら」という二重敬語（二重尊敬）は半数以上の支持を得ている。
- ⑥「お求めやすい」という形式は慣用として高い支持を得ている。
- ⑦「お手紙」の謙讓語としての用法も高い支持を得ている。
- ⑧従属節内での対者敬語の使用については、「（通り）まして」に抵抗を感じる人は少ない。「（食べ）ましたら」への訂正は少数派であるが、以前よりは増えてきているようである。
- ⑨主節での尊敬語の使用はほとんど義務的だが、従属節での使用は規範が緩くなっている。
- ⑩尊敬語を丁寧語で代用することは非常に少ない。

注

- 1) 記号論を意味論・統語論・語用論に三分類するC.W.モリスの考えに従えば、ここで言う「記号論的誤用」は「意味論的誤用」となる。
- 2) 語用論的誤用についての調査は、この観点からの分析はなされていないものの、これまで国立国語研究所などが行なってきた社会言語学的な敬語調査の枠組みの中でじつは行なわれている。これらの研究は、要するに、「誰が、誰に対して、どういう状況で、どの形式を用いるか」を調査しているわけであるが、規範と大きくかけ離れている回答を集めれば、それが語用論的誤用のデータとなるわけである。

参考文献

石野博史・稲垣文男(1987)「現代人と敬語－第1回言語環境調査から」

- 『放送研究と調査』37-7
- 石野博史・丸田実・土屋健(1989)「ことばの正しさ美しさ－第3回言語環境調査から」『放送研究と調査』39-8
- 稲垣文男・竹田スエ・石野博史(1976)「視聴者からみたアナウンサーの敬語(1)」『文研月報』26-10
- 内山理恵(1991)「現代敬語事情－高校生・短大生のアンケート結果に見る意識と使用」『たまゆら』23
- 大石初太郎(1983)『現代敬語研究』筑摩書房
- 国立国語研究所(1964)『国研報告25 現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 分析』秀英出版
- 坂本恵(1984)「丁寧語の周辺－「おる」について」『国語学 研究と資料』8
- 田中章夫(1969)「敬語論議はなぜ起こる」『言語生活』213 [『論集日本語研究 9 敬語』(1978, 有精堂)に再録]
- 西山ほなみ(1989)「敬語の現状とその展望－大学生の敬語意識を中心に」『国語年誌』8
- 濱崎賢太郎(1990)「中学生・高校生・大学生の敬語知識・敬語行動」『武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編』38
- 三尾砂(1958)『話しことばの文法』法政大学出版局
- 安平美奈子(1993)「若者の敬語－その意識と実態 “若者とことば” アンケート調査から」『放送研究と調査』43-10
- 盧顕松(1989)「従属句における対者敬語」『国語学 研究と資料』13

(国立国語研究所研究員)